

日刊報道誌と週刊報道誌における見出しの構造 ならびにその明確さと簡潔さ

宮 崎 彰 男

Patterns of the Headline in the Daily and the Weekly News Articles With Special Reference to Its Clarity and Brevity

Akio MIYAZAKI

1. はじめに

日本語であろうと英語であろうと、言語というものは場面の脈絡によってその言語体系の使われ方が変動する。あるメッセージが、書かれた形式によるものであるのか、話された形式によるものであるのか、メッセージの送り手がだれであるのか、受け手がだれであるのか、また、両者の関係はどのようなものであるのか、さらに、そのメッセージの社会的な役割や話題はどのようなものであるのか——このような場面の脈絡の諸要素は実際の言語表現におけるシンタグマティックな構造に影響を与えるものである。会話の英語、広告の英語、さらには、文学の英語などに関する研究は、言語理論に関わる研究や言語体系そのものに関わる研究の対局にあるとみなされることもあろうが、しかしそれでも地道な、それなりの意味を持つ研究であろう。このような観点に立った研究の1つとして、本稿では英語のニュース記事の言語特徴、特に、見出しの構造について調査し、論述する。

2. 目 的

この小論はニュースの記事の見出しがどのような構造によって形成されているか調査し、その傾向を示すことによって報道英語の特徴の一面を明らかにすることである。

見出しはニュースの記事の顔である。我々が、たとえば、自分の家族の一員のことをだれかにたずねられて写真を見せるとき、必ず顔の写っている写真を見せるはずである。手だけ写っていたり、脚だけ写っているような写真を見せることはないであろう。全身の写真でもよい。上半身の写真でもよい。しかし、見せる写真に、顔が写っていないければ意味がない。顔が人物を認識するときに重要な役割を担うのと同じく、また、ある興味を引かれた本があっても、そのタイトルを忘れるとその本が我々の認識からどこかわからない世界に逃げていってしまうように感じるのと同じく、見出しは読者の目に最初に飛び込んでくる部分であり、ニュースの記事にとってその顔と言うことのできる基本的に重要な要素である。記事の本文 (Body) と比べて、通常、見出しには大きなポイントが使われたり、肉太活字が使われたりするのはこのことを物語っている。

見出しはこのようにニュースの記事にとって非常に重要な要素であるが、一方では、読みづ

らいという側面を持っている。母語で書かれた記事の見出しの場合は成人話者にとってこの点に関して困難はあまりないであろう。しかし、母語で書かれていても成人話者でない場合は、たとえ母語の言語体系の基本を獲得していようと、程度の差はあれ、見出しを理解するには困難を覚えるであろう。このことは、すなわち、ニュースの記事の見出しにある種の言語特徴があり、それが作用しているということである。以下においては、見出しをその構造によっていくつかの類を設けて分類し、それぞれの類の頻度を示して、見出しがどのように構造化される傾向があるかということを見ていきたい。また、次の項でわかるように、以下で取り扱う見出しの事例は日刊報道誌の記事からの事例と週刊報道誌の記事から事例から成っており、両者の間の異なる特徴も論じるつもりである。

3. 収集資料と分析の方法

収集資料は全体で850事例である。これらはすべてインターネット上で収集された見出しで、週刊報道誌 *Time International* (以後、*TI* と表示) からの422例、日刊報道誌 *CNN* からの209例、そして日刊報道誌 *Electronic Telegraph* (以後、*ET* と表示) からの219例から構成されている。¹ これらは1996年と今年1997年のニュース記事から収集されたものである。

収集資料はいくつかの方法で分類されることが可能であろうが、見出しの構造上の特徴を捉えることを考えると、次のような分類がその特徴を比較的わかりやすく表すことになるのではないと思われる。まず、「A. 節」と「B. 句」とに分けて、それぞれの類の下に次のように分類する。

A. 節

A. 1. 動詞が表面にある型

A. 1. 1. 定形動詞節

A. 1. 1. 1. 単1の節

A. 1. 1. 2. 主従関係にある複数の節

A. 1. 1. 3. 等位関係にある複数の節

A. 1. 2. 非定形動詞節

A. 1. 2. 1. 主語が表面にある型

A. 1. 2. 2. 主語が表面にない型

A. 2. 動詞が表面にない型

B. 句

B. 1. 名詞句

B. 1. 1. 主要語が1つの名詞句

B. 1. 1. 1. 主要語

B. 1. 1. 2. 主要語 + 後置修飾

B. 1. 1. 3. 前置修飾 + 主要語

B. 1. 1. 4. 前置修飾 + 主要語 + 後置修飾

B. 1. 2. 主要語が複数の名詞句

B.2. 形容詞句

B.3. 副詞句

「A. 節」は「A.1. 動詞が表面にある型」と「A.2. 動詞が表面にない型」に下位分類されている。

「A.1. 動詞が表面にある型」は、その動詞がどのような形式をしているかによって、さらに「A.1.1. 定形動詞節」と「A.1.2. 非定形動詞節」とに下位分類される。

前者の「A.1.1. 定形動詞節」の下にある「A.1.1.1. 単1の節」、「A.1.1.2. 主従関係にある複数の節」、「A.1.1.3. 等位関係にある複数の節」は節の数、そして複数の節がある場合にはその関係による類別である。「A.1.1.2.」には、定形動詞節同士が、または定形動詞による主節と非定形動詞による従節が、接続詞によって接続されている事例と、それに加えて、定形動詞節と to 不定詞など非定形動詞節が含まれている事例も含める。後者は、いわゆる分詞構文や目的などを表す to 不定詞が定形動詞節と共に起している事例である。なお、「A.1.1.3.」には主語を共有している2つの定形動詞節が等位接続詞で結ばれている事例も含めている。

後者の「A.1.2. 非定形動詞節」は主語があるかないかによって、「A.1.2.1. 主語が表面にある型」と「A.1.2.2. 主語が表面にない型」に分けられる。「A.1.2.1.」には主語とそれに後続する非定形動詞、すなわち、現在分詞、過去分詞、to 不定詞のいずれかによる事例が入ることになる。なお、「A.1.2. 非定形動詞節」においても、節の数や関係によってさらに区別を行うことも可能であるが、調査対象の事例を観察した限りではそこまで細分化する必要はあまりないと考え、行わなかった。「A.1.2.2.」の下では非定形動詞による節で主語を持たない事例を扱う。

「A.2. 動詞が表面にない型」に含まれる典型的な事例は、主語＋形容詞と続くような見出しである。省略されている動詞は大多数の事例において be 動詞である。

見出しには節の形式をとらず、句によって表されている事例も多い。そのため「A. 節」に対して「B. 句」を設け、それを「B.1. 名詞句」、「B.2. 形容詞句」、「B.3. 副詞句」に下位分類する。「B.2. 形容詞句」と「B.3. 副詞句」は事例数も少なく、下位分類を特に設けてはいない。しかし、「B.1. 名詞句」はかなりの事例数があり、(前置修飾＋主要語＋後置修飾)の基本的構造の具現の仕方に基づいて4つの下位分類を設けている。後置修飾には後置された形容詞だけでなく、ランクシフトされた前置詞句や形容詞節も含まれることになる。事例の中には1つの主要語によるものだけでなく、複数の主要語が現れている事例もあり、これらは「B.1. 名詞句」の中で分けて表すことになる。

なお、収集資料の中にはこれまで述べた類にあてはめることが難しい事例もある。それらについては下の〈表1〉の前にある注2の中で言及することにする。

4. 結果と考察

すでに述べたように、収集した見出しは全体で850事例、その内訳は週刊報道誌TIからの422例、日刊報道誌CNNからの209例、そして同じく日刊報道誌ETからの219例である。これらの中には設定した類に適合しにくい事例が29例見出された。その内訳はTIが27例、CNNが2例、ETなし、である。その結果、調査の対象となった報道誌別の事例数(1)、週刊/日

刊別の事例数 (2)、ならびに合計 (3) は次のとおりである。²

次の〈表 2〉と〈表 3〉はこの 821 の事例を先に述べた類に分類した結果である。

〈表 1〉調査対象事例数 (821 例)

掲 載 誌	(1)	(2)	計 (3)
<i>Time International</i>	395	395	821
<i>CNN</i>	207	426	
<i>Electronic Telegraph</i>	219		

〈表 2〉「A. 節」(501 例)

A. 1. 動詞が表面にある型			計
A. 1. 1. 定形動詞節			計
A. 1. 1. 1. 単 1 の節	303	369	476
A. 1. 1. 2. 主従関係にある複数の節	64		
A. 1. 1. 3. 等位関係にある複数の節	2		
A. 1. 2. 非定形動詞節		計	
A. 1. 2. 1. 主語が表面にある型	63	107	
A. 1. 2. 2. 主語が表面にない型	44		
A. 2. 動詞が表面にない型			計
			25

〈表 3〉「B. 句」(320 例)

B. 1. 名詞句			計
B. 1. 1. 主要語が 1 つの名詞句		計	302
B. 1. 1. 1. 主要語	7	278	
B. 1. 1. 2. 主要語＋後置修飾	76		
B. 1. 1. 3. 前置修飾＋主要語	114		
B. 1. 1. 4. 前置修飾＋主要語＋後置修飾	81		
B. 1. 2. 主要語が複数の名詞句		計	
		24	
B. 2. 形容詞句			計
			4
B. 3. 副詞句			計
			14

4. 1. 「A. 節」と「B. 句」

この結果からまず観察できることは、節の形式で表されている見出しが句の形式で表されているそれと比べてかなり多いということである。百分率で表すと、全体を 821 例として、「A. 節」は 61.0% (501 例)、「B. 句」は 39.0% (320 例) となる。節の形式が句の形式の約 1.6 倍で、節の形式による見出しのほうが一般的であることがわかる。「A. 節」の下位類にはさまざまなタイプの節が含まれているわけであるが、このことは少なくとも見出しが「(～は

[が]) ～する [である]] という形の陳述で書かれる傾向が強いことを示している。例えば、³

ET057

Skinheads rally at Auschwitz to back plans for shopping center

(*Electronic Telegraph/International*, Issue 357, Monday April 8, 1996)

CN160

Troops to be on high alert for Bosnia elections

(*CNN WORLD News*, September 12, 1996)

他方、見出しが句によって形成されている場合、その句と一緒に上位の構成素を形成する要素が与えられていないので、当然ながら、その分、読者は不足している情報を補おうとすることが普通である。特に、名詞句で表されている見出しにあっては、それを節のどの構成素と位置づけるかは、通常、不確定である。主語にもなり得るし、また、補語あるいは目的語にもなり得る。節構造におけるそのような不確定さに加えて、句によって与えられる情報はどうしても限られているので、このような句による事例では読者の外言語的な知識にその解釈を委ねる割合が増すであろう。

TI300

SINGAPORE : Harsh Words

(*TIME International*, March 24, 1997)

この見出しは恐らくそれだけでは何のことを言っているのかほとんど解釈できないのではなかろうか。*harsh* と *word* の意味を知っておれば言語的にはその意味を理解できるが、それだけでは現実的な解釈は難しいであろう。

記事の見出しに要求される特徴の中に「簡潔であること」と「明確であること」が含まれていると考えてよいであろうが、この「簡潔であること」を手短なことと、そして、「明確であること」を解釈しやすいことと考えるならば、上の結果はニュース記事の見出しが一般的に言って「明確であること」を実現する構造で表現される方向に傾いていることを示していると言える。

節と句の事例の掲載誌別の分布は次のようになっている。

<表 4> 「A. 節」の掲載誌別分布 (501 例)

掲 載 誌	事例数
<i>Time International</i>	115
<i>CNN</i>	197
<i>Electronic Telegraph</i>	189

<表 5> 「B. 句」の掲載誌別分布 (320 例)

掲 載 誌	事例数
<i>Time International</i>	280
<i>CNN</i>	10
<i>Electronic Telegraph</i>	30

<表 4> は、「A. 節」の 501 例中、*TI* が 115 例 (23.0%)、*CNN* が 197 例 (39.3%)、*ET* が 189 例 (37.7%)、後者の 2 つを合わせて 386 例 (77.0%) で日刊報道誌の分布が高いことを示している。一方、<表 5> は、「B. 句」の 320 例の中で、*TI* が 280 例 (87.5%) という実に

高い割合で分布しているが、CNNは10例(3.1%)、ETは30例(9.4%)で、両者を合わせても40例(12.5%)であることを示している。

見方を変えてそれぞれの報道誌を基準にし、「A. 節」と「B. 句」への分布を観察してみよう。〈表1〉を参照しながら〈表4〉を見ると、「A. 節」にTIの395例中の115例(29.1%)、CNNの207例中の197例(95.2%)、ETの219例中の189例(86.3%)が該当していることがわかる。2つの日刊報道誌の分布を合わせると、426例中の386例(90.6%)という高分布になり、週刊報道誌と日刊報道誌に現れる見出しの構造上の傾向差が顕著である。他方、同様に〈表1〉を参照しながら〈表5〉を見ると、これに対応する事実が明らかである。TIの395例中の280例(70.9%)という多くの見出しが「B. 句」の構造で表現されている。CNNは10例(4.8%)、ETは30例(13.7%)見出されるのみである。先に、調査資料全体の一般的な傾向として、ニュース記事の見出しが「明確であること」を実現する構造で表現される傾向が見られることを指摘したが、資料の2種類の典拠を考慮に入れると、このことは特に日刊報道誌にあって言える特徴であり、TIにあっては、「簡潔であること」が見出しの基本的な要請で、「B. 句」による見出しが非常に顕著であるという事実は、この要請を満たそうとする方向性の結果であろう考えられる。

4. 2. 「A. 1. 動詞が表面にある型」と「A. 2. 動詞が表面にない型」

〈表2〉が示しているように、節の形式による見出しの分布は「A. 1.」に偏っている。その偏りは501例中の476例(95.0%)である。一方、「A. 2.」はわずかに25例(5.0%)である。「A. 1.」についてはこの後、述べることにし、ここでは「A. 2. 動詞が表面にない型」についてその例を1つ示して論述する。

ET100

Spanish poll winner close to power deal

(*Electronic Telegraph/International*, Issue 365, Thursday April 18, 1996)

25例のほとんどすべてがこのような本動詞としての *be* が省略され、主語の後に形容詞が続く見出しである。かりに省略されている動詞が使用されていた場合、おそらくその動詞の形は定形と考えられるので、時制が明示されることになる。しかし、この引用でも分かるように、動詞が表面に現れていなくてもそれによって得られなくなる情報は時制だけである。そして、時制が明示されていたとしても、後で述べるように、見出しにあっては定形動詞は大多数が現在時制で生じており、見出しによって述べられている出来事の実質的な時間を見出しの表現のみからは特定できないのが普通である。それゆえ、この点では動詞が表面にあらうがなかろうが明確さの程度はほとんど変わらないと考えてよいだろう。このような場合、見出しにあっては当然のことながら短い言い方のほうが好まれる。上に引用したような例では、「～が～である」が明確に示されつつ、簡潔さも維持されているのである。

興味深いことに、この25例はすべて日刊報道誌からである。その内訳は、CNNが10例、ETが15例である。これらの報道誌においては、上の意味での明確さが保証される範囲内で、見出しを手短で、簡潔な構造に盛ろうとしているようである。

4. 3. 「A. 1. 1. 定形動詞節」と「A. 1. 2. 非定形動詞節」

＜表 2＞が示しているように、両者の事例の合計は 476 例で、そのうち「A. 1. 1.」は 369 例 (77.5%)、「A. 1. 2.」は 107 例 (22.5%) である。定形動詞と非定形動詞の違いは、定形動詞が時制を明示するのに対して、非定形動詞は時制に関して中立であるということがある。時制とそれが表す時間は必ずしも 1 対 1 の対応をしているわけではないが、可能性としては、時制が明示されているほうが意味伝達上、時間についての解釈は限定され、その程度に解釈は時制が明示されない場合よりも容易になると考えられる。しかし、見出しの英語にあっては、動詞が定形であろうと非定形であろうと、いずれの場合もそこで意図されていることはその構造の単純化あるいは簡潔化であると考えられる。というのは、動詞が定形で時制を表していても、その時制はほとんどの事例において現在時制であり、見出しに述べられている出来事の現実の時間を明確には規定していないからである。

4. 3. 1. 「A. 1. 1. 定形動詞節」

次の 3 つの見出しを見てみよう。

TI001

COVER : India's Voters Throw the Rascals Out

(*TIME International*, May 20, 1996)

CN133

Protestant youths clash with police in Northern Ireland

(*CNN WORLD News*, July 7, 1996)

ET043

Rand falls as finance minister is replaced

(*Electronic Telegraph/International*, Issue 356, Friday April 5, 1996)

定形動詞 *throw*、*clash*、*falls* は現在時制である。現在時制、厳密に言えば、単純現在時制は一般に無制限の時、現在時、未来時、そして特殊な場合、過去時を表すが、*throw*、*clash*、*falls* の現在時制が現実にはどの時間を指しているのかは言語的には分からない。⁴ この例の場合、過去の時を表していると考えられるが、場合によっては、解釈は最終的には読者の言語的知識よりもむしろそれを超えたレベルの現実界の知識に訴えられることもあろう。通常、この例におけるように、見出しに現れる現在時制は、いわゆる歴史的現在の用法と同じく、過去時を表すことが一般的で、このことは調査した資料からも確認できるところである。

動詞が現在時制以外の時制で出現している事例は極めて少ない。過去時制、現在完了形、現在進行形、助動詞 *will* を使った形式が現れる例を合わせてもわずか 10 数例である。次の見出しはそのうちの 2 つである。

CN070

U. S. diplomats doubted nun's story

(*CNN WORLD News*, May 9, 1996)

ET010

Fantasy is fading fast for the Boer extremists*(Electronic Telegraph/International, Issue 353, Tuesday April 2, 1996)*

以上のことから分かるように、「A. 1. 1.」の事例は大多数が現在時制で表されており、そこに定形動詞が使われていても、これらの事例は時制の区別やアスペクトの利用によって、意味しようとする時間を可能な範囲で規定する形式で表されていないのが普通である。アスペクトを利用した複雑な（それゆえ、長い）動詞句よりも単純時制の形を、さらに、単純時制の形であっても、過去の出来事を劇的に表すことの可能な現在時制⁵の形のほうを好む傾向が見出しの英語には明らかである。

＜表2＞で示した定形動詞節の369例のうち「A. 1. 1. 1. 単1の節」が303例（82.1%）で、この類の大部分を占めている。これも、見出しが単純な構造で簡潔さを求めて表現される傾向が強いことを表している。

掲載誌別の、複数の節よりもむしろ単1の節へ、という偏りはどの程度であろうか。下の＜表6＞に示したように、*TI*は67例中63例（94.0%）、*CNN*は160例中122例（76.3%）、*ET*は142例中118例（83.1%）という割合である。週刊報道誌において単1の節への偏りが、より著しいことがうかがえる。

＜表6＞「A. 1. 1. 定形動詞節」（369例）

掲 載 誌	A. 1. 1. 1.	A. 1. 1. 2.	A. 1. 1. 3.	計	計
<i>Time International</i>	63	4	0	67	302
<i>CNN</i>	122	36	2	160	
<i>Electronic Telegraph</i>	118	24	0	142	

4. 3. 2. 「A. 1. 2. 非定形動詞節」

「A. 1. 2.」は先にも述べたように、時制には関与しない見出しを形成する。時制には中立的であるので、「A. 1. 1. 定形動詞節」と異なり最初から時間に関する情報は省かれている。この類にはさらに主語が維持されている下位類「A. 1. 2. 1.」と主語が省かれている下位類「A. 1. 2. 2.」がある。これらの掲載誌別の分布は次のようになる。

＜表7＞「A. 1. 2. 非定形動詞節」（107例）

掲載誌	A. 1. 2. 1.	A. 1. 2. 2.	計	計
<i>Time International</i>	6	42	48	59
<i>CNN</i>	26	1	27	
<i>Electronic Telegraph</i>	31	1	32	

「A. 1. 2.」の107例中、*TI*が48例（44.9%）、*CNN*が27例（25.2%）、*ET*が31例（29.0%）、2つの日刊報道誌を合わせて59例（55.1%）である。一方、この＜表7＞から、掲載誌別の「A. 1. 2. 1. 主語が表面にある型」と「A. 1. 2. 2. 主語が表面にない型」に関する分布のばらつきは顕著である。*TI*の48例中の42例（87.5%）が「A. 1. 2. 2.」の下に、そして、*CNN*の27例中の26例（96.3%）、*ET*の32例中の31例（96.9%）が「A. 1. 2. 1.」の下にある。

これら「A.1.2.」の107例の見出しは、現在分詞、過去分詞、*to*不定詞、動名詞といった非定形動詞のいずれかを含む例で、最初の3つの非定形によるものは次に引用するごとく一般に助動詞の*be*または本動詞の*be*などが省かれ、時制が明示されない。与えられる言語的な情報はその程度に減じられるわけであるが、結果として、動詞が省略された分、簡潔な見出しを生むことになる。

「A.1.2.1. 主語が表面にある型」は、〈表7〉において明らかであるように、その63例中の57例(90.5%)をも2つの日刊報道誌から得ている。次の見出しはそれらのうちの3つである。いずれも*be*が省略されている。

CN106

Czech prime minister apparently losing parliamentary majority

(*CNN WORLD News*, June 2, 1996)

ET188

Student accused of Internet death threat

(*Electronic Telegraph/International*, Issue 392, Monday May 27, 1996)

ET123

First aborigine judge to sit in Australia

(*Electronic Telegraph/International*, Issue 378, Tuesday May 7, 1996)

これら3つの見出しにあって、理論的には*be*は現在時制を表す定形をとってもよいし、過去時制を表す定形をとってもよい。しかし、見出しの英語においては、最初の例のような現在分詞がある場合、通常、過去の一時的な状況を表す‘*was losing*’よりも現在の一時的な状況を表す‘*is losing*’と読まれるであろう。2つ目の例のような過去分詞がある場合は、‘*was accused*’と過去の出来事を表すものとして読まれるのが普通であろう。もっとも、見出しの表現の規範からすると、この過去の出来事を現在時制で表すことも考えられる。最後の例におけるように*to*不定詞がある場合は、通常、過去から見た未来時を表す‘*was to* ~’と読まれるよりも、これから先のことを表す‘*is to* ~’と読まれるであろう。ここにおいても、見出しの英語は読者にこのような判断をすることを求め、あるいは、そのような判断ができることを前提にし、それ自身は簡潔であることを追求していると言ってよいだろう。

「A.1.2.2. 主語が表面にない型」は、〈表7〉において明らかであるように、その44例のうち42例(95.5%)が*TI*からの事例である。次の見出しはそのうちの2つである。

TI359

VIETNAM : Going It Alone

(*TIME International*, April 14, 1997)

TI259

COVER : Getting Off Drugs?

(*TIME International*, March 10, 1997)

これらの見出しにある *-ing* 形は現在分詞なのであろうか。それとも動名詞なのであろうか。現在分詞と考える場合、このような見出しの節は主語と助動詞 *be* が省かれている節なのであろうか。あるいは、もしかしたら省かれているかもしれない別の節に付加される副詞節なのだろうか。この最後の可能性は、2つ目の例にあってはそれに疑問符が付されているので、考慮に入れなくてもよいだろう。また、主語が明示されていないわけであるが、それは主語に一般的、いわゆる総称人称 (*we*, *you* または *they*) をあてがって読んでもよいということなのだろうか。

通常、記事の見出しの直後には短い導入部 (Leading Text) が提示されている。上記の見出しの導入部⁶から判断すると、恐らく、その *-ing* 形は現在分詞で、総称人称による主語と助動詞 *be* の現在形が表面に出されていないのであろう——“*They Are Going It Alone*”/“*Are They Getting Off Drugs?*”⁷

このように「A. 1. 2. 2.」の構造は言語的に不確定な要素がいくつかある。さらに、この調査で収集され、「A. 1. 2. 2.」に類別された見出しの多くは、いま行ったような言語的修復を加えてもその解釈がいくらか容易になるとは言えない事例である。ここでは、簡潔さへの要請が明確さを弱めていると考えられよう。「A. 1. 2. 2.」の事例の分布と「A. 1. 2. 1.」の事例の分布が日刊報道誌と週刊報道誌で著しく逆転している点は興味深い。

4. 4. 「B. 1. 名詞句」と「B. 2. 形容詞句」と「B. 3. 副詞句」

「B. 句」の 320 例がこれら 3 つの類にどのように分布しているかは、既に〈表 3〉に示されているとおりである。「B. 1.」⁸にそれらの大多数である 302 例 (94.3%) が集中し、「B. 2.」は 4 例 (1.2%)、「B. 3.」は 14 例 (4.3%) である。また、「B. 2.」と「B. 3.」の事例は、2 つの日刊報道誌には見出されず、すべて TI からである。

「B. 1. 名詞句」については次のセクションで観察することにし、ここでは「B. 2. 形容詞句」と「B. 3. 副詞句」に関して例証していくことにする。

TI165

CINEMA : **Mad For Evita**

(*TIME International*, January 20, 1997)

TI085

RUSSIA : **Down to the Wire**

(*TIME International*, July 8, 1996)

最初の見出しは「B. 2.」の例である。これはその表面の構造において節ではないが、“*They Are Mad For Evita*”と考えるならば、先の「A. 1. 2. 2. 主語が表面にない型」の見出しと対応する特徴を持っている。一方で、本動詞 *be* が省略されていると想定すれば、“*They Mad For Evita*”を得ることになり、4. 2. で扱った「A. 2. 動詞が表面にない型」の特徴と対応する特徴を持っていると言えよう。結局は、主語と動詞を明示することによって得られる情報量よりも失われる簡潔性を重視して、形容詞句の形になっているのであろう。

次の副詞句の見出しは慣用表現⁹で形成されている。この見出しの導入部¹⁰からすると、“*The Election Will Go Down to the Wire*”という形式、あるいは、より報道英語的な形式“*T*

he Election Goes Down to the Wire”が想定される。見出しそれ自体としては、ここで主語と動詞、特に、主語を省くことは伝達すべき大切な情報を失うのではないかと思われる。これは先の総称の代名詞の主語がない形容詞句の例と比べて重大な問題である。しかしそれでも、我々の前にあるのは主語も動詞もない副詞句の見出しである。考えられることは、そのねらいとしてまず、これまで使ってきた意味での簡潔性があるということである。しかし、それだけではなく、慣用表現の持つ簡潔性、換言すれば、意味の凝縮性、さらに、この種の表現に内在する他の通常の表現からの突出性があることを指摘することができよう。「B. 3. 副詞句」は 24 例と少ないが、そのうちこの引用した見出しを含めて 5 例が慣用表現で提示されている。

4. 5. 「B. 1. 1. 主要語が 1 つの名詞句」と「B. 1. 2. 主要語が複数の名詞句」

両者の分布は<表 3>で示したとおり、「B. 1. 名詞句」の 302 例中それぞれ、278 例 (92. 1 %)と 24 例 (7. 9%)である。名詞句による見出しはほとんどの場合、単 1 の主要語をその中に持つ名詞句「B. 1. 1. 」で形成されていることがわかる。

掲載誌別には、*TI*の高分布が顕著で、「B. 1. 1. 」の 278 例中 245 例 (88. 1%)、「B. 1. 2. 」の 24 例中 22 例 (91. 7%)である。4. 1. 「A. 節」と「B. 句」で述べたように、日刊報道誌の見出しの節への著しい偏りに対して、*TI*の見出しにあっては、句への著しい偏りが再確認される。

4. 5. 1. 「B. 1. 1. 主要語が 1 つの名詞句」

最初の下位類「B. 1. 1. 1. 主要語」の例は絶対数が小さいので、¹¹ それ以外の 3 つの下位類について述べることにする。

「B. 1. 1. 2. 主要語+後置修飾」の事例は 76 例で、このうち *TI*が 62 例 (81. 6%)、*CNN*が 3 例 (3. 9%)、*ET*が 11 例 (14. 5%)である。

TI102

CAMBODIA : Rift in the Khmer Rouge

(*TIME International*, August 26, 1996)

TI225

Land Of Despair

(*TIME International*, February 17, 1997)

上の 2 つは *TI*の見出しで、「B. 1. 1. 2. 主要語+後置修飾」の例であるが、この類に含まれるこの報道誌の見出しは総じて短く、約 3 語から 4 語で作られている。それに対して、日刊報道誌の見出しは約 6 語から 7 語で、その分、一瞥して見出しを認識することが難しくなっていると感じられる。ちなみに、ランクシフトされた節を後置修飾に持つ見出しは、*TI*に 1 例、*CNN*なし、*ET*に 4 例であった。*ET*は 11 例中 4 例ということで、62 例中 1 例の *TI*と比べて長くなる傾向を示している。

ET037

Challenge for Rao from wrestlers and parrots

(*Electronic Telegraph/International*, Issue 356, Friday April 5, 1996)

ET112

South Africa in plea to lift sanctions on Libya

(*Electronic Telegraph/International*, Issue 366, Friday April 19, 1996)

最初の2つの見出しは本のタイトルにしてもおかしくないように思われるが、これら2つの見出しはやや長く、そして特に最後の見出しは散文的と感じられるので、本のタイトルにするにはもう少し簡潔にしなければならないかもしれない。言い換えれば、特に最後の例は分類の枠組みしだいで本動詞 *be* が省略されている節とすることも不可能ではなく、「(～は [が]) ～する [である]」という陳述の形式を想起させるということである。このような事例は *TI* にあっては、「B. 1. 1. 2.」だけでなく他の名詞句の下位類においても見られなかった。

「B. 1. 1. 3. 前置修飾+主要語」の事例は114例で、このうち *TI* が113例、*CNN* が0例、*ET* が1例という極端な分布である。

TI012

NEW ZEALAND : Kiwi Firsters

(*TIME International*, May 27, 1996)

TI315

No Major Tears

(*TIME International*, March 31, 1997)

この類に属する見出しのほとんどは2語もしくは3語で表現されている。前置修飾部を多くの語によって構成し、長くすることは理論上不可能ではない。形容詞は無数に使うことが規則上許されるし、また、形容詞の前に副詞を置いてそれを修飾することも可能である。しかし、事例を観察すると、実際には、前置修飾部は形容詞1語またはそれとそれに先行する決定詞から構成されているのがほとんどである。このような短い構造と、上で言及した *TI* の極端な分布は偶然の一致ではないであろう。また、逆に言えば、日刊報道誌からの例がこの下位類においてはに等しいというのも偶然のことではないであろう。どちらかと言うと、一方は簡潔性を志向し、一方は明確性を志向している、というこれまでの議論を裏付ける事実の1つである。

「B. 1. 1. 4. 前置修飾+主要語+後置修飾」の事例は81例で、このうち *TI* が58例 (71.6%)、*CNN* が5例 (6.2%)、*ET* が18例 (22.2%) である。

TI061

SAFETY : The Dark Side of Airbags

(*TIME International*, June 24, 1996)

ET151

Dying climber's farewell call to pregnant wife

(*Electronic Telegraph/International*, Issue 383, Tuesday May 14, 1996)

この類の見出しは、*TI*で約4語から5語、日刊報道誌で約6語から7語で書かれている。やはり、後者の事例のほうが長めである。¹²さらに、「B. 1. 1. 2. 主要語＋後置修飾」に関しても述べたことであるが、「(～は [が]) ～する [である]」という陳述の形式を想起させる見出しが日刊報道誌に4例見出される。その1つが次の引用である。

CN030

No end in sight for fighting along Lebanon-Israel border

(*CNN WORLD News*, April 14, 1996)

この事例は“**No end is in sight for...**”あるいは“**There is no end in sight for...**”というその派生前の節構造を想起させる可能性があるとも言えないだろうか。構造的には名詞句であっても、それを構成する部分がより大きな構造である節の構成素でもあり得ることを読者に意識させるとは言えないだろうか。とにかく、「B. 1. 1. 4.」においても、以上のことから、掲載誌の類によって簡潔性への傾きと明確性への傾きがかなり明らかなであると述べることが可能であろう。

4. 5. 2. 「B. 1. 2. 主要語が複数の名詞句」

「B. 1. 2.」の見出し24例のうち22例が*TI*からであることはすでに4.5. 「B. 1. 1.」と「B. 1. 2.」で指摘した。これら24例は、「B. 1. 1.」の下にある名詞句の4つの展開を幾通りかに組み合わせた構造で見出されるのであるが、¹³そのうち同一の展開を反復させた構造によるものが半数以上の16例である。そして、このうち15例は*TI*の見出しである。

TI180

Nepal's Lost Daughters, “India's Soiled Goods”

(*TIME International*, January 27, 1997)

この見出しには同一の前置修飾＋主要語の名詞句の構造がコンマをはさんで現れている。前置修飾部はどちらも2つの項目から構成されているという点で、その展開に同一の選択がみられる。最初の項目はいずれも固有名詞に－'sを付した所有格の決定詞、次の項目はいずれも形容詞化した過去分詞で、ここにも同一の選択がみられる。このような等価な構造の繰り返しは整然としていて目立ちやすいという特徴からであろうか、見出しの構造として特に週刊報道誌に好まれているようである。

5. おわりに

ニュース記事の見出しにみられるいくつかの一般的な構造形式ならびにその特徴を、調査資

料を分類し、その具体的な事例を観察しながら論述してきた。調査資料は量的にさらに大きくする必要があるが、それでも設定された類への分布を示すことによって、見出しが言語化されるときの一般的な傾向は明らかにされたと考えている。簡潔であることと明確であることは常に見出しに求められている性格であるが、日刊報道誌と週刊報道誌とでは、大きく言って、その性格面で逆の方向を向く傾向があるということも興味深い結果である。

注

- 1 *TI*は <http://www.pathfinder.com/@@OetPbAU AyyBP8bPp/time/magazine/index.html> から、*CNN*は <http://www.cnn.com/WORLD/> から、*ET*は <http://www.telegraph.co.uk/et?ac=000116818549934&rtmo=34418db6&atmo=34418db6&pg=/ixworld.html> から収集した。
- 2 収集事例から省いた事例が*TI*に多くあったが、週刊/日刊別の事例数(2)に見られるとおり、両者の調査対象事例がほぼ同数であるので、週刊/日刊別の比較は可能であると考ええる。
 なお、省いた事例に関してであるが、それらは2種類に分けることができる。そのうちの1つは「2つの発話から成る見出し」(TI158 *Curves Ahead : Slow Down* (*TIME International*, January 20, 1997) など計8例)、もう1つは「導入部の1部を利用している見出し」(TI326 *TELEVISION : CNN launches its first non-english [sic] network into a tough market* (*TIME International*, March 31, 1997) など計19例)である。いずれもこの調査で設定している類には該当しないので、調査対象事例からは除外した。
- 3 以下、引用する見出しには、筆者自身の後の参照を容易にするため収集したときに付した番号を維持する。番号の前にある‘ET’は*Electronic Telegraph*、‘CN’は*CNN*、‘TI’は*Time International*を表す。
 なお、*TI*の見出しは、しばしば、それに先行する国名、地名、(SCIENCE ; CINEMAのような)社会活動の分野、(ENVIRONMENT ; SAFETYのような)一般的なトピックなどと一緒に提示されるが、ページ上では両者は異なる色の文字で表されているので、この調査では、先行部分は見出しの1部とみなしていない。これに加えて、記事の本文のページへのリンクが後続部分、すなわち、ここで規定した見出し、によって張られていることも、先行部分を見出しの1部と扱わない理由である。*CNN*と*ET*においても同じような表示がいくつかあったが同様の扱いをする。
- 4 この議論で基準となる現在の時は、見出しの記事が報道された時である。つまり、引用例の後に示されている日付が示している時ということになる。
- 5 単純現在時制の用法の1つに、発話の瞬間にそれによって述べられている行為が始まり、そして完結することを表す瞬間的用法がある。記事の見出しにおける単純現在時制の使用と瞬間的用法に内在する表現力に関しては次のコメントが参考になる : In newspaper headlines, the Simple Present is preferred (no doubt because of its brevity) to the Past or Perfect Tenses as a way of announcing recent events...The ‘headlinese’ use of the Present Tense has something of the dramatic quality of the ‘instantaneous present’. — Geoffrey N. Leech, *Meaning and the English Verb* (London : Longman, 1971), p. 8.
- 6 TI359の導入部は“The country’s aging rulers — and their fears about the ills of capitalism — are prompting a return to nationalism”、TI259の導入部は“As Albright gives out a passing grade, Zedillo decides to impose a radical reform of his badly tarred enforcement agencies”となっている。
- 7 記者は客観的に報道していると考えて、代名詞は*they*としている。
- 8 「B.1. 名詞句」(302例)での掲載誌別分布は、4.1. 「A. 節」と「B. 句」で示したそれと近似しており、次のようになっている — *TI* : 262例 (86.8%), *CNN* : 10例 (3.3%), *ET* : 30例 (9.9%), 後者2つを合わせて40例 (13.2%)。

- 9 *Cambridge International Dictionary of English* (1995) の **wire** の項目下には次のような説明と例文がある: “If a situation goes (**down**) **to the wire**, the result of it is not known until the end: *I think the election will go right down to the wire.*” この慣用表現は競馬のコンテキストに由来しており、*wire* とはゴールの二つの柱に結ばれたものであったらしい。Cf. *Webster’s Third New International Dictionary* (1969).
- 10 TI085の導入部は次の通りである: “Continuing intrigue in the Kremlin is a mere taste of what may come, as the Russians elect a President this week”
- 11 *TI*の7例のみである。
- 12 後置修飾にランクシフトされた節を持つ見出しは、*TI*に3例、*CNN*なし、*ET*に1例であった。
- 13 以下がその構造である。() の中の数は事例数。
1. (主要語) + (主要語) (9)
 2. (主要語) + (主要語) + (主要語) (1)
 3. (主要語) + (主要語) + (前置修飾+主要語+後置修飾) (1)
 4. (主要語) + (前置修飾+主要語) (2)
 5. (主要語) + (前置修飾+主要語+後置修飾) (2)
 6. [(主要語) + (主要語)] + 後置修飾* (3)
 7. (前置修飾+主要語) + (前置修飾+主要語) (5)
 8. (前置修飾+主要語) + (前置修飾+主要語) + (前置修飾+主要語) (1)
- * [] は2つの主要語が同じ後置修飾によって修飾されていることを示す。